

「ヘキサゴンプラン」を 全教師の日々の教育活動の柱に

栃木県 宇都宮市立上河内西小学校

宇都宮市立上河内西小学校のカリキュラムの中心にあるのが「ヘキサゴンプラン」だ。目指す児童像の実現に向け、あらゆる教育活動の中からどこに重点を置くかを定めたプランである。全学年の教師が課題や目標を共有し、日々のすべての活動が目標へ向かって組み込まれている。

課題

- 外に向けて自分を表現する力が弱かった
- 自分から進んで学ぶ積極性に乏しかった
- 思いやりの心を備えた言動が足りなかった

カリキュラムの概要

- 「目指す児童像」に向けて教育の重点を定めた「ヘキサゴンプラン」を、教科指導や日常的な実践に具体的に落とし込んでいく

カリキュラムづくりの流れ

- 校長が「ヘキサゴンプラン」を策定、教職員全員で共有
- より具体的な「教育課程自校化プラン」を教職員全員でつくる
- 子どもの良い面を更に伸ばすため、良い指導は継続して残していく

カリキュラムと実践のかかわり

- 教科学習だけでなく、行事や日常生活でも「ヘキサゴンプラン」を踏まえたねらいの達成を目指す
- 実践案は教師全員で意見を出し合い、検討する
- 教師の負担軽減に向け、「1人1アイデア」を導入

成果

- ねらいに向けた小さな実践の積み重ねにより、児童に思いやりの心などが育まれている
- 教師間の意識の共有により学校の組織力が向上した
- 教師の多忙感を軽減しながら、ねらいを達成できるようになった

S c h o o l D a t a

◎1967（昭和42）年開校。羽黒山の麓、豊かな自然に囲まれた田園地帯にある。食育に注力するほか、2007、09年度には栃木県「健康推進学校表彰最優秀校」に選ばれた。



校長 刀川啓一先生

児童数 153人 学級数 6学級

所在地 〒321-0412 栃木県宇都宮市関白町471

TEL 028-674-2011

URL <http://www.ueis.ed.jp/school/kamikawachi-w/>

公開研究会 未定

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

課題とカリキュラムの概要

「目指す児童像」を あらゆる教育活動で意識する

穏やかな田園風景に包まれる宇都宮市立上河内西小学校は、全学年が単学級の小規模校だ。6年間を通して固定された人間関係の中で過ごすことの長所と短所を、刀川啓一校長は次のように話す。

「気心の知れた友だちと共に学び、深い関係を築けることは良いことだと思います。その反面、外に向けて積極的に自分を表現する力が育ちにくい環境にあります。また、少数ですが、友だちを傷つけてしまうような言動をする子どもがいることにも、課題を感じていました」

学習面では、教師の指示を素直に聞き、課題を出せばまじめに取り組む子どもが多い。しかし、忍耐強く考える力や、自ら進んで学ぶ意欲、失敗を恐れずにチャレンジする積極性が乏しいことに、多くの教師は「何とかしたい」という思いを抱いていた。

こうした子どもの実態を出発点として「目指す児童像」を掲げ、すべての教育活動を通して実現させようとしているのが、同校のカリキュラムの特色だ。中心となるのは「ヘキサゴンプラン（2010年度の学校教育の重点）」である（P.17図1）。

「目指す児童像」には「ひとりで」「仲良く」「たくましく」の三つの大項目が掲げられ、それぞれ具体的に付けた力や明文化されている。これらの力は、毎年、子どもの実態を踏まえて見直している。例えば、09年度は国語科を中心に表現力を高める指導に力を入れていたが、指導の過程で、表現力の土台として学びへの主体性を育てる必要性を実感した。そのため、10年度は、「ひとりで」の中に「自ら進んで学べる子」という項目を盛り込んだ。「目指す児童像」を基に「学校経営方針」も毎年再考している。

「ヘキサゴンプラン」には六つのプランがある。「ひとりで」はプラン1・2、「仲良く」はプラン3・4、「たくましく」はプラン5が対応している。プラン6は、「目指す児童像」ではなく、「学校経営方針」の中の「開かれた学校づくりの推進」に対応した内容になっている。例えば、「ひとりで」に示した力を付けるための教育活動として、プラン1「確かな学力の定着・向上」と、プラン2「読書活動の推進」が充てられ、それぞれ教育内容や工夫のポイントが書かれている。

「ヘキサゴンプラン」の下には「教育課程自校化プラン」がある（P.17図1下部）。学習指導要領の重要なポイントを確認する作業を経て、「ヘキサゴンプラン」を各教科や領域等に具体的に落とし込んだものだ。

教師は、「ヘキサゴンプラン」で大きな方

向性を、「教育課程自校化プラン」でより具体的な指導内容を共有している。

カリキュラムづくりの流れ

教育の柱を共有し 教師全員で計画を作成

毎年、「ヘキサゴンプラン」は刀川校長が中心となり、副校長と相談しながら作成し、「教育課程自校化プラン」は教師全員で教科や領域ごとに分担してつくる。いずれも入学式までには完成させ、年度当初から実践する。「次年度に異動する可能性があっても、全員で作成を分担しています。子どもの実態を



宇都宮市立上河内西小学校
学習指導主任 石川晴美
Shikawa Harumi



宇都宮市立上河内西小学校
教務主任 福田知香子
Fukuda Chikako



宇都宮市立上河内西小学校校長
刀川啓一
Tachikawa Keiichi

把握した教師が、新たに赴任してくる教師に本校の取り組みを引き継ぐという意味を込めて、次年度のプランをつくってもらっています」(刀川校長)

教師全員で「教育課程自校化プラン」をつくることにも大きな意味がある。教務主任の福田知香子先生は次のように説明する。

「『教育課程自校化プラン』をつくるためには、『ヘキサゴンプラン』を相当読み込む必要があります。その過程を経ることで、本校で重点を置く教育活動が何かを共有できます。また、他の教師がつくったプランに従うだけでは、意識は高まりません。自分がつくるからこそ、担当した教科や領域以外もしっかり読もうという気持ちになるのです」

「教育課程自校化プラン」の作成により、学校の教育の重点に沿った授業のイメージを持つことが出来る。例えば、「ヘキサゴンプラン」1の「確かな学力の定着・向上」のために、国語では「話す」「聞く」についての指導を重視すること、授業の見直しと共に、朝の時間を活用することが示されている。こうして、学年間で重点化すべき内容が統一され、指導の系統性が保たれる。

「学校組織として同じ方向に動くには、皆が教育の柱を共有し、どのような努力をすればよいかを理解する必要があります。柱はなるべく簡潔にして、それがどの指導につながるのかが具体的に見えやすくなるように心掛

けています」(刀川校長)

例えば、毎年4月に開くクラスごとの保護者会では、担任が保護者に対して、学校の経営方針や学習の実態、その年度に重点を置く教育活動などについて説明する。その際、教師が「ヘキサゴンプラン」を通して「開かれた学校づくりの推進」のねらいを正しく理解しているからこそ、保護者に学校の教育活動を説明し、協力をお願いなども出来る。

「日々の実践において、全校共通の柱は絶対が必要です。たとえ実践は同じでも、その意味や位置付けをしっかりと理解していない教師がいた場合、教師によって説明の仕方などが異なってしまう」(福田先生)

教育の重点を決める上では、指導の継続性も重視している。その方針は、「目指す児童像」「学校経営方針」「ヘキサゴンプラン」が4色に色分けされていることに表れている。加筆・修正した箇所が年度ごとに異なる色で書かれており、4年前までの変更点がさかのぼって分かるようになっていた。

「教育では、新しいものが何でも良いとは言えません。子どもの良さを伸ばしてきた指導は継続した上で、課題に対しては新しい指導を積極的に取り入れたいと思います。そのため、どの指導を継承しているのか、どの年度から新たな指導に重点を置いているのかを、視覚的に分かりやすくしています」(刀川校長)

カリキュラムと実践のかかわり

学校行事や日常生活を通じて 課題にアプローチ

「ヘキサゴンプラン」は、教科学習だけでなく、学校行事や清掃、昼休みなど、あらゆる教育活動に反映されている。近年では、特に重視するプラン4「心をはぐくむ活動の充実」の実現のために、学年縦割りの活動を充実させている。

「本校には元々、優しい子どもが多いため、その良さを更に伸ばし、学校全体の良さになりたいと考えました。また、乱暴な言動が見られる一部の子どもも十分に育みたいというねらいもあります。児童会や遠足、運動会、清掃、昼休みの遊びなどに縦割り班を取り入れ、異年齢交流を通して共に助け合う心の育成を目指しています」(刀川校長)

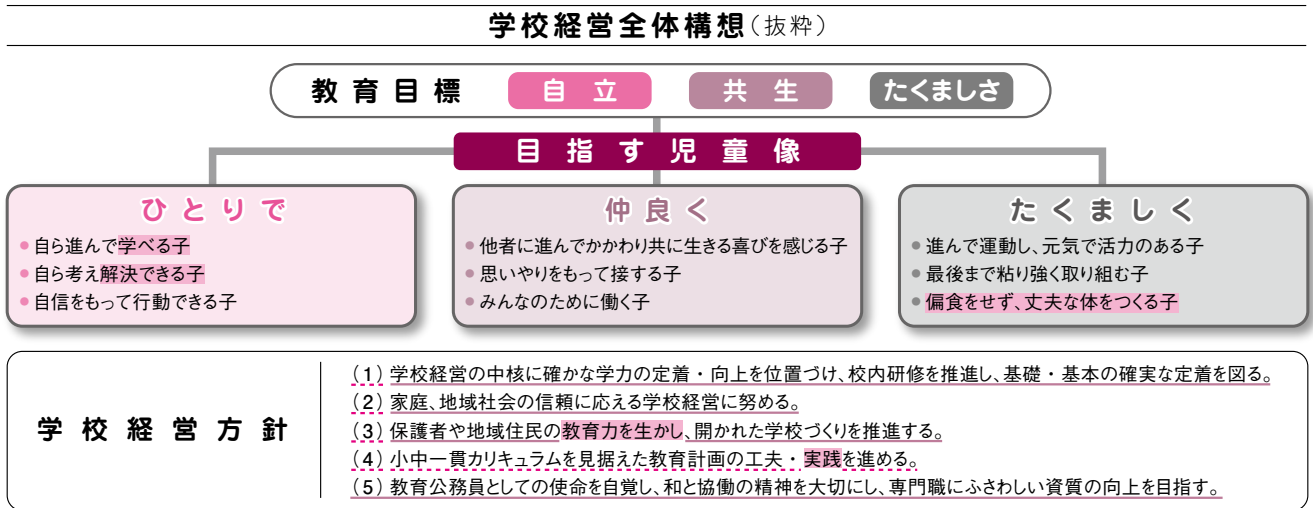
更に、授業参観では全学級で「命」や「家族愛」をテーマとした道徳の授業を行った。保護者や地域に実践を公開すると共に、このテーマは特に保護者などの考えを聞くことが、子どもの「命」や「家族愛」への考えを深めることになるからだ。授業参観という場も、目指す教育へ向けて最大限に活用しているのだ。

学校行事や特別活動の計画は、「目指す児童像」に迫るため、「ヘキサゴンプラン」を

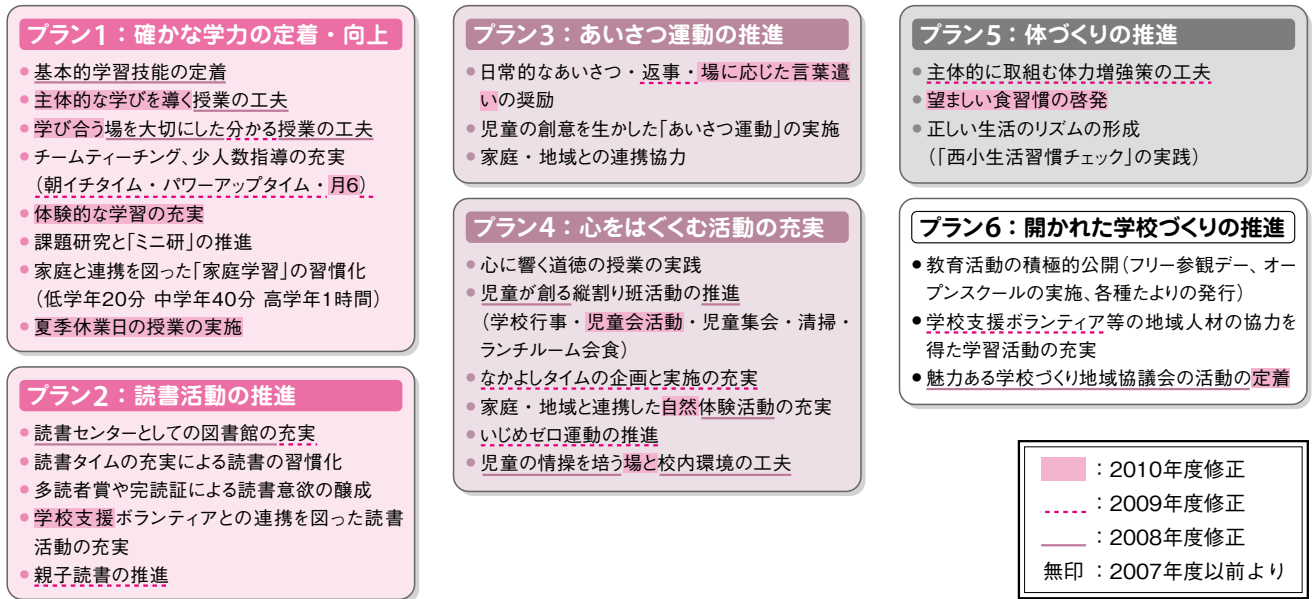
「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

図1

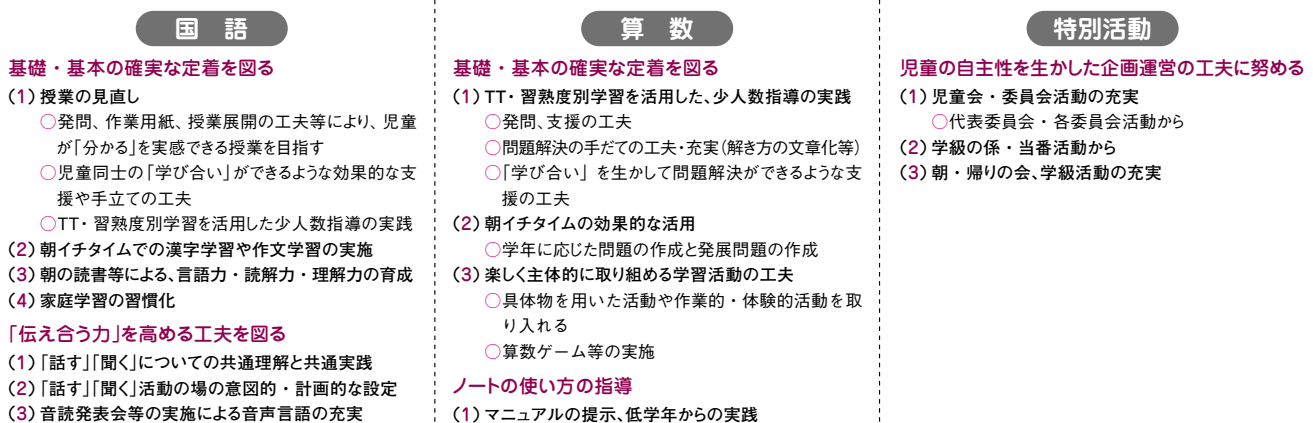
平成22年度 カリキュラム全体像



本年度の学校教育の重点（ヘキサゴンプラン）



教育課程自校化プラン（抜粋）



*同校の資料を基に編集部で作成。「学校経営全体構想」の実物では修正した年度により文字の色が異なるが、本図ではアミ掛けや下線で示している

踏まえて考えられ、職員会議で提案される。それに対し、刀川校長を含めた全教師が「このようなねらいもあってもよいのでは」などと意見を出し合い、計画を練り上げていく。例えば、運動会は毎年、前年度の反省を踏まえて種目の数や内容を検討し直す。学習指導主任の石川晴美先生は次のように話す。

「09年度の体力テストの結果、ソフトボール投げが弱かったため、10年度の運動会では、ボールを使った種目を取り入れました」

教師全員で学校を運営しているという意識があるため、職員会議の意見交換も活発だ。

「一人の意見は全員の意見」という雰囲気があり、意見をよく聞かれます。若手の先生も自分の意見が生かされていくため、前向きな気持ちで活動に取り組めます」（石川先生）

負担を減らしながら ねらいを達成する「経営統合」

同校では伝統的に学校行事に力を入れており、それが教師を多忙化させている面もあると、刀川校長は話す。

「これ以上、何かが加わったら子どもも教師もパンクしてしまう」と感じることもあるのも事実です。それでも、一番に考えるべきは子どものことで、活動にはそれぞれねらいがありますから、『忙しい』という理由で取りやめて、子どもに力をつけるのを諦めたくはありません。何かやり方を変えなければな

図2 「経営統合(負担軽減に向けた1人1アイデア)」による改善例

「音読発表会」の実施形態の変更

音読発表会のねらい 外に向けて自分を表現する力が弱いという課題の克服

改善前

全校児童や教師が体育館に集まって実施。大勢の聞き手を前にした発表のため、事前練習に多くの時間を費やしていた。

課題

緊張感のある場で発表をする良さはあったが、当日や事前練習に要する時間が授業時数を圧迫していた。

石川先生が職員会議で改善案を提案

改善後

低・中・高学年のブロックに分かれ、廊下のオープンスペースを使った発表会に変更。授業で学んだことをそのまま発表するようにして、練習時間を減らした。

成果

練習時間が短縮されて授業時数に余裕が生じた。三つのブロックに分けたことで、発表者と聞き手の距離が近づいて過度に緊張しない状態で参加できるようになり、互いの頑張りをつたえ合う温かい雰囲気生まれた。

成果や反省を踏まえた今後の展望

更なる改善案

今回は1年生と6年生など年齢の離れた学年でブロックを構成し、「1年生にアドバイスをする」「6年生の発表の上手さを感じる」といった機会として心の交流を促す場にもしたい。

その他の改善例 「交通安全教室」の実施形態の変更

校庭に作った模擬道路で実施していた「交通安全教室」を、安全に留意した上で、周辺の道路で行うことにした。校庭にラインを引くなどの準備時間が不要になったほか、実際の道路で行うことで訓練の効果も高まった。

らない状態ですが、すべてを変えるのは現実的ではありません。ねらいを達成しながらスリム化を図りたいと考えたのです」

10年度は刀川校長の提案で、「経営統合」として教師が一人一つずつ、負担を軽減するアイデアを出している。これにより、石川先生が提案した「音読発表会」をはじめ、いくつもの活動が見直された(図2)。

6年間の成長を見据えた指導も、同校の特徴といえるだろう。月1回、教師全員が参加する「児童指導連絡会」では、子どもの実態を話し合い、全児童の様子を共有する。

「上の学年に足りないと思われることがあれば、下の学年の指導を改善するなど、縦のつながりを意識した教育が出来ます」(福田先生)

「目指す力」と実践をつなぐカリキュラム

小規模校で教師数が少ないということもあり、教師は互いに「支え合う」という意識を強く持っている。例えば、学習の定着に向けて昼休みに行っているプリント学習の時間には、担任以外の教師もクラスに入って指導し、刀川校長も添削を手伝う。

どの教師も児童全員の名前を覚え、気になる子どもに対して方針を共有してかかわっていることなども、効果的な指導につながっている。

成果

日々の実践の積み重ねで 思いやりの気持ちが育まれる

こうしたカリキュラムによる学校運営は、どのような成果を生み出しているのか。

まず、一つのねらいに対して教科学習や特別活動などで多角的に迫ることにより、目指す力が子どもの中に育まれていることが挙げられる。

「一例ですが、縦割り班で行う登山遠足では、教師の指導がなくても、上級生が下級生の荷物を持ったり、足場の悪い場所で手を引いたり、自然と面倒を見る場面が多々見られました。子どもたちの中にそのような気持ちが育っていたのだとうれしくなりました。これは、縦割り班を日常の場面に取り入れる、

道徳の授業に重点を置くなど、小さな積み重ねが表れたものだと思います」（石川先生）

その背景にあるのは、教師が子どもの課題や教育のねらいを共有し、一丸となって目標の達成を目指す体制が出来たことだ。「皆が同じ方向を向かなければ、学校としての組織力は高まらない」と刀川校長は強調する。

更に、どの教師もねらいを意識して計画を練るため、反省点や改善点も明確になる。ねらいから計画を作成、見直しというサイクルを繰り返すことで、授業力や企画力、保護者への説明力など「個人力」が高まり、その集合として「学校力」も向上しているという。

教師の多忙感も軽減されている。09年度、刀川校長は「目的を見定めた上で、多忙にならないように工夫しましょう」と教師に話したが、それだけではなかなか改善に結びつかなかった。そこで10年度は、「一人一つのアイデアを」と具体的な施策を呼び掛けたところ、実際の改善につながった。

「疑問を持ちながら取り組んでいたことが改善されるのは良いことです。実態に合ったものになれば、時間や労力が軽減されるだけでなく、精神的なストレスもなくなり、気持ち良く子どもと向き合えます」（福田先生）

職員室では、雑談形式で気軽に相談でき、一人で悩むことはないという同校。子どもの実態を見つめた全員での取り組みはこれからも続けられていく。

刀川校長が重視する

校長としての役割

児童の持つ良さを伸ばしていくことを大切にしています。本校の子どもは、素直で優しいところが何よりの長所です。人権教育や心の教育を継続的に大切にして、その良さを更に伸ばしていくことで、子どもの自己存在感を高めたいと思っています。卒業生が人権教育で学んだことを表現した作品は、本校の思いや願いをよく表しています。これからも玄関の目立つ場所に飾り続けるつもりです。

また、常に勉強を続けることも、強く意識して自らに課しています。民間経営の考え方も含め、参考に出来るものは何でも取り入れながら、より良い学校経営を模索していきたいと思っています。



写真 卒業生が人権教育の学びの成果を表した作品。作品を作ることには課されていなかったが、当時の6年生がこのような気持ちになったことがとてもうれしかったと刀川校長は話す。心をはぐくむ教育に力を入れる同校の特色を表すものとして玄関に飾られている